

# グローバル化と戦争

## イラク占領の「日本モデル」について

西川長夫

### はじめに

『グローバル化を読み解く88のキーワード』の出版は予定より1年以上も遅れ、かなりの難産でした。いまこの本を手にとって、若者向きの一見明かなくて軽妙な表紙に覆われた小さな書物の重さを感じています。まず初めに言いたいことは、この書物の完成に協力して下さった執筆者、編集者、出版社、研究所、そしてこの書物に名前は記されていないが応援し力を貸して下さった多くの方々への感謝の気持と、このような良い作品を手にする事ができた喜びの気持です。だが今日は単なるお祝いの会ではなく、合評会ですから自分に対して厳しい視線を向けるべきだと思います。

『グローバル化を読み解く88のキーワード』の序文として、「グローバル化のなかで考える」というタイトルの文章を書かせていただきました。このようなタイトルになったのは、編集 執筆に当たっている間、とりわけ9.11以後の急激な変化のなかで、自分たちが今グローバル化のなかにあることを強く感じざるをえなかったのが理由の一つです。何か異様な緊張のなかで考えることを強いられていて、その状態は現在も続いている。今日これから話すことはその続きというか、つまり「グローバル化のなかで考える」の続篇と考えていただいたらよいと思います。

この序文が予定より長くなってしまったのは、一つには88のキーワード全体にかかわるような視座を作ろうという苦しい努力の結果ですが、同時に88のキーワードの助けを借りて自分なりの独自のグローバリゼーション解釈を出そうという意図があったからです。もっとも執筆者の意見はさまざまで、前もってかなりの議論はしたけれど、意見の調整はしていませんから、序文に書かれているのは統一的

な意見ではありません。意見の対立や多様性を尊重したいというのが編集の基本方針ですから、この後の合評会でもいろいろ反論や批判的な意見が出て議論が展開されることを期待しています。

### グローバリゼーション論の陥穽

「グローバル化のなかで考える」の最終節は「グローバリゼーション論の陥穽」と題されています。これはグローバル化の問題を考え文章化している間に、自分の脳裏に去来していた疑問と反省を記したもので、三つの項目にまとめられています。

第1はちょっとどぎつい言い方ですが、「知的植民地状況」と記しておきました。これはグローバリゼーションに関する理論や言説の大部分がアメリカ発かアメリカ経由であり、反米あるいは反グローバリゼーションの言説でさえも、多くはアメリカ発で結果的に語っているのは、世界の中心がアメリカであり、私たちはアメリカの圧倒的な圧力の下にあるということです。ここでは現在の巷の英語熱と横文字、カナ文字の氾濫が、敗戦直後のアメリカ軍占領時代を思わせるという私の個人的な感慨に重ねて、「そうした一方的な言説の流れは、世界的なメディア支配の構図のなかで実現しているものであり、それ自体がグローバリゼーションの一現象であるが、それは同時に対米従属国日本の知的植民地状況を示すものでもあるだろう」と書いておきました。

第2は「帝国中心の眼差し」とあります。これは第1の場合と関連していますが、グローバル化をめぐる言説の大部分は、グローバリゼーションの中心からの視座によるものであり、グローバル化の複合性や、それに対する反応の多様性を描きだすのに適切な視座であるとは思えない、という疑問と反省です。ネグリとハートの「帝国」論に対するわずかば

かりの批判をこめて書いているのですが、グローバル化を進める側の視座から見ると、見えないもの、脱落するものが多いのではないかと。搾取される周辺部から見えるグローバル化は全く異なった様相を示すであろうし、またEUや中国など形成されつつある別種の帝国の過小評価にもつながりはしないか。あるいはまた日本のような従属的であると同時に支配的でもある準帝国の存在の考察が疎かになるのではないかと、等々。

第3は、「日本における植民地主義の『忘却』と『回帰』」日本ではいま何が起こっており、私たちはそれをどう引き受けるか、という問題です。今日は、言葉足らずに終わっているこの最後の項目に説明を加えながらさらに展開させてみたいので、少し長くなりますがその部分を読ませていただきます。

(3) 日本における植民地主義の「忘却」と「回帰」。第3に、グローバリゼーション論における日本と、したがってわたしたち日本の住民の位置について。わたしは本稿の前半において9.11以後におけるアメリカの帝国主義と国民主義への回帰現象を強調したのであるが、それはとりわけ小泉内閣以後、日本で顕著になった類似の回帰現象を念頭に置いてのことであった。規制緩和や社会・福祉予算の縮小を図りながら国内市場を世界市場に開くネオリベリズムが強調される一方で、歴史教科書や学校教育、ジャーナリズム、等々のイデオロギー装置を通じての国民主義の強化が図られ、他方で軍事＝警察的な体制が強化される。そうした状況は、グローバリゼーションの名の下に行われるアメリカの世界政策の引き写しのようにわたしたちの目には映る。

とりわけ9.11以後における小泉内閣の対米協力の姿勢は、日本の従属的な立場を強く印象づけるものであった。そしてアメリカで再びメンバー・パールハーバーが叫ばれ、「アフガン戦争」や「イラク戦争」後の占領政策に、「日本モデル」が浮上するとき、わたしたちは日本の戦後とアメリカの戦後の関係について再考を強いられたはずである。アメリカと日本の回帰の類似性はもちろん偶然ではなく、複雑に結びついている。この点で、9.11の少し前に翻訳が出版されたジョン・ダワーの『敗北を抱きし

めて』(岩波書店、2001年)は貴重な示唆を与えるものであった。この書物は、わたしの考えではアメリカに対する日本のほとんど植民地的といいたくなるような従属的な関係のなかにある、共犯的相互依存関係に照明を当てることになったからである。宗主国であると同時に植民地でもあった日本の二重性。第二次大戦後の連合軍による占領と戦後改革、ダワーのいう「日米合作」は、戦前の植民地支配に対する日本人の記憶の忘却をもたらした。現在のグローバリゼーションの波は、いま戦後日本の国内と国外における政治的・経済的・文化的諸事件の記憶の忘却をもたらそうとしている。グローバリゼーションは第2の連合軍(実質的にはアメリカ軍)の占領となるのであろうか。

2001年9月11日以後のアメリカ合衆国において注目される、帝国主義と国民主義への回帰現象については、私はすでに『戦争の世紀を越えて』(平凡社、2002年)で強調し、この序文でも指摘しているので、ここではくりかえししません。ここでの問題は、それが日本における類似の回帰現象とどのようにかかわっているかです。日本ではとりわけ小泉内閣の成立以後、その方向が戦前の日本を目指している、つまり戦後に失われたものの回復がもくろまれていることは、いっそう明らかになってきました(国旗国歌法、憲法改正、教育基本法改正、有事立法、等々)。このような国民主義の動きは、グローバル化の波が世界に呼び起こしているさまざまなタイプのナショナリズム(この序文では10のタイプを挙げておきました P.xv)の一つであることは確かですが、しかし日本の場合はアメリカへの従属が強く、日本政府の政策はまるでアメリカの世界政策を忠実になぞっている。とりわけ9.11以後の小泉政権の対米協力の姿勢は、日本の従属的な立場を強く印象づけるものでありました。

だがアメリカにとって、あるいはより限定的にアメリカの現政権にとって、日本とはあるいは私たち日本の住民とはいったいどのような存在なのでしょう。この大問題にいま完全な答を出すことは不可能です。たとえ何十年か後に十分な歴史的史料が整えられたとしてもむずかしい。だが私たちはいま限

られた材料で判断を下すことを求められている。歴史のなかで考えるとそういうことだと思います。私にいまできることは、テレビや新聞やあるいはインターネットを介して飛び交う情報のなかから、適当に選択して自分なりの判断やイメージを描き出すことくらいです。ここではブッシュ政権やとりわけブッシュ大統領の用いるいくつかの「ことば」に注目してみたいと思います。ブッシュは、ケネディやクリントンとは異なる独自の用語法を持っており、その用語を通してブッシュとその周辺が思い描く世界が、ある程度、想像できるのではないのでしょうか。

### ジョージ・ブッシュの演説と用語法

それにしても何ともひどい演説であり用語法です。もしこれが、アメリカの議会や政府といった権威の場で、アメリカ大統領という権威による発言でないとしたら、それこそ「ならず者」のことばだと思います。それは明快で力強い、一種の雄弁ですが、自分とは意見の異なる他者を説得することではなく、一方的な信念の吐露であり、呼びかけられた同調者以外にとっては、独善的、強圧的、そして時には脅迫的な言辞に満ちている。

ブッシュはそのような雄弁をどこで学んだのでしょうか。おそらくその一部は、合衆国の政治的伝統、つまりアメリカのデモクラシーに根差している。だが他方で、ジョージ・L・モッセが分析したようなヒトラーの説演との類似を強く感じさせます。「ヒトラーの演説は全体的演出と祭儀のリズムによく統合されていた。それはバロック時代の教会で、有名な説教師の果たしたような機能であった」（佐藤卓己・佐藤八寿子訳『大衆の国民化』柏書房、p.209）とモッセは書いています。ブッシュの場合、バロック時代ではなくて、現代の私たちが欧米の日曜のテレビでよく見かけるような現代の教会であってもよいと思います。モッセが強調しているのは、それが<sup>カルト</sup>祭祀的であるということです。9.11以後のアメリカの愛国的熱狂を考察する場合に、祭儀をとり行なうものとしてのブッシュという観点はきわめて興味深い。演説の内容（空疎なものだと思いますが）で

はなく、それがどのような形式でどのように言われるかが問題なのです。

モッセはさらに演説のリズムと構成、とりわけリズムに注目して、次のように書いています。「このリズムは好戦的かつ攻撃的であり、特に演説者の感動的な抑揚を必要としていた。ヒトラー自身、演説とはハンマーを連打するようにして、民衆<sup>フォルク</sup>の心の扉を開けるものだと書いていた。ヒトラーの演説は論理的に構成されていることが多かったが、内的な論理は声のリズムと躍動でぼかされていた。このため演説の論理を情緒的に感得していた。つまり、実際の内容を把握するのでもその意味を熟考するのでもなく、聴衆は闘志と信念のみを感じ取った。群集はよどみない弁舌そのものに心を奪われ、演説の内容を吟味するどころか演説を「生きた」のであった。演説の構造は、イデオロギーを実践する体験全体の統合要素として機能した。」（同上書、p.210）

ブッシュがヒトラーであると言うつもりはありません。しかしその外見のあらゆる差異にもかかわらず、ブッシュの演説が小ヒトラー的な様相を呈する瞬間があることは否定できないと思います。（時間があればここで小泉首相の演説の小ブッシュ的特徴を分析したいのですが、省略します。）もし聴衆が、「実際の内容を把握するのでもその意味を熟考するのでもなく、闘志と信念のみを感じ取って」反応していたとすれば、いずれは高い代償を支払うことになるのではないのでしょうか。そして小ヒトラーは、大ヒトラー以上の災害を、人類にもたらさないとはい限らない。

モッセはヒトラーが「明快さ」を強調していたこと、そしてその「明快さ」は「いっさいの妥協の拒否」と「行動」への意志につながるものであることを指摘しています。ブッシュの演説の「明快さ」にもこの指摘は当たっていると思いますが、ブッシュの「明快さ」はとりわけ善悪、味方と敵、文明と野蛮といった単純な二項対立的図式に由来しており、この単純な二項対立的図式を許している背景には、一つには宗教的な原理主義、もう一つは現代アメリカを頂点に再編成された西欧中心の歴史観があるように思われます。その結果ブッシュの用語法は道徳的な用語と並んで歴史的な用語が頻出する。もちろん

んこの二種の用語の間には密接な関連があります。9.11のあとブッシュが最初に口走った「ならず者国家」(Rogue States)と「十字軍」はその一つの典型でしょう。

「ならず者国家」というのはブッシュ特有のカウボーイの用語法に属するのでしょうか。「ならず者」というのは下品な一種の罵りことばで、やくざ間の抗争ならいざ知らず、少なくとも一国の元首が他国に対して向けるべきことばではありません。さすがにこれは直ちに引込まれましたが、その代りに出てきたのが「悪の枢軸」でした。「悪の枢軸」として名指された国は、イラン、イラク、北朝鮮ですが、この用語が第二次大戦時の英米を中心にした連合国に対する枢軸国(日独伊)という歴史的背景をもっていることは明らかです。「ならず者国家」が「悪の枢軸」と言い換えられることによって、アメリカの大統領府に支配的な善悪二元論と、冷戦後の唯一の超大覇権国の独善と傲慢がより明快に表現されることになりました。

「報復」戦争の呼びかけに際して「十字軍」ということばが持ちだされたことは、さらに世界の常識を驚かせるものでした。教皇の呼びかけによって11世紀末から始められた「十字軍」が、ヨーロッパのキリスト教徒によるイスラム世界の侵略であることは今では世界の常識です。現在のローマ教皇ヨハネ・パウロ二世は、すでに十字軍が侵略戦争であったことを認め謝罪しています(教皇はさらに2003年1月13日、イラク戦争が予想されるなかで「戦争は運命ではなく人類の敗北である(...)戦争は国際紛争を解決するために選ぶことのできる手段の一つではない」と、まるで日本国憲法の第九条を思わせるような言い方で、戦争に反対の意を表明しています)。

「十字軍」は、アラブ・イスラム世界にとって、13世紀から今日に至るまで、西欧による侵略と略奪の代名詞です。アラブ・イスラム世界との緊張が高まる危機的な状況のなかで、アメリカ大統領が、野蛮に対する文明の側の「無限の正義」(Infinite Justice)の行使として「十字軍」の結成を提唱するなどということは、よほどの無知か確信犯的独善以外に考えられません。もっともそう考えるのは論理

(あるいは倫理)に従う者の立場であって、この用語法は初めから論理や倫理を無視して、感情に、あるいはさらに言えば国益を口実にした強者の欲望に従っているのかもしれませんが。そうした非論理が世界に跋扈(ばっこ)しているとしたら、それは末世の風景であり世界崩壊の兆しでしょう。

「ならず者国家」とともに「十字軍」の文字も、さすがに報道の文面からは消えました。しかしながら「十字軍」ということばを呼びだすことになった「野蛮」と「文明」の二分法や「正義」はいっそう強調され、アフガン攻撃は「無限の正義作戦」(Operation Infinite Justice)となります。ブッシュによって発せられた「十字軍」ということばから見えてくるのは、ここでも善悪、正邪という単純な二分法と、文明と野蛮というこれも単純な二分法にもとづいた自己中心的歴史観です。それは世界の中心に自己があり、進歩の先端に自分が位置しているという、一種の進歩史観であり、「文明化の使命」という昔なつかしい植民地時代のイデオロギーの再現です。大航海時代以来の、あるいは近代の西欧の膨張主義を支えたこのイデオロギーが、すでに絶滅したと思いきんだのは私たちの錯覚で、このイデオロギー的怪獣は新大陸で生きのび、増殖しつつあったのかもしれませんが。

ブッシュの用語法のなかに、初めから日本へのさまざまな暗示が秘められていることを感じとっていたのは、私だけではなかったと思います。「悪の枢軸」ということばを聞いたとき、第二次世界大戦を少しでも記憶している人は、その用語が歴史的に何を意味しているかは直に理解されたはずですが、もっとも9.11と呼ばれるようになった事件自体が、とりわけ私たち日本人にとっては第二次大戦を連想せざるをえないものでありました。欧米では9.11以前からパレスチナやイスラエルの「自爆テロ」は「カミカゼ」と呼ばれており、それを聞いたたびに私は胸をしめつけられる思いをしていました。ツインタワーに突入する航空機の映像は、大戦末期にアメリカの軍艦に突入する特攻隊のイメージと二重映しになっていました。やがて米軍機によるアフガン空爆や洞窟の残兵を火炎放射器で焼き払う米兵の映像は、かつての本土空爆や沖縄戦を想起させずにはお

きません。だが何といっても9.11以後の諸事件と第二次大戦を直接結びつけたのは、アメリカに起きた「パールハーバー」の一語です。

もちろんブッシュ自身が国民や世界に向けて「リメンバー・パールハーバー」と叫んだわけではありません。だがブッシュの演説は後から思い起こすと、「パールハーバー」を想起させることばやイメージに満ちています。私の記憶では、アメリカの「パールハーバー」言説が日本に伝えられるのは、事件のかなり後のことだと思いますが、アメリカでは事件の直後から現われているようです。日本でもよく知られている著名な歴史家キャロル・グラックは日本近代史研究者としてはめずらしく、「9月11日 21世紀のテレビと戦争」と題された論文のなかで、テレビを通じてナラティブ、つまり「テロリズムに対する戦争」の「英雄物語」が形成されてゆく過程をたどりながら次のように述べています。

...そして1時間もしないうちに、ナラティブの形式があらわれた。そのナラティブはパールハーバーのアナロジーを伴っていた。これは、活動家から10代の若者、女優、テレビのキャスター、そしてヘンリ・キッシンジャーに至るまで、あたかもそれぞれが自分で自発的にこの比較をおこなったかのように、さまざまなところから出てきたのである。それはまだジョージ・ブッシュが「テロリストによる攻撃らしい」と言っていた時点のことであった(『現代思想』2002年7月号、72頁)。

もっともキャロル・グラックは、それが日本や第二次世界大戦とは無関係であることを強調して、直ちに次のようにつけ加えます。「ただし、自然発生的にあちこちにあらわれたパールハーバーというメタファーは、日本あるいは第二次世界大戦とはまったく関係がなかった。むしろ、それはアメリカにとってはいまひとつの「無垢の喪失」という意味であり、やがてアメリカが立ち上がり、悪に対する善の戦争を優勢にすすめる、勝利にいたるであろうことを含意していた」。

「いまひとつの「無垢の喪失」という解釈は魅力的です。だが、ここでなぜ「日本や第二次世界大

戦とはまったく無関係」と断言することができるのでしょうか。同じ文章のなかでグラックは、第二次大戦中の日系人強制収容を引き合いに出して、思慮のない偏見が戒められた事実を述べています。またツインタワー跡が「グラウンド・ゼロ」と呼ばれることについて、アメリカ人のどのくらいの人が、それが「原爆の爆心地」を意味することを知っているのだろうか、とも書いています。おそらくそれを知識として知る人は少ないだろう、だがそのことばが使われたこと自体はすでに大きな意味をもつことであり、命名者の意図は別として無意識的な歴史の記憶というものもあるのではないのでしょうか。いずれにせよ、その後の過程を見ても、パールハーバー言説が日本に全く無関係というのは無理だと私は思います。私の関心はむしろ、著名な日本史研究者が、この時点でなぜパールハーバー言説と第二次世界大戦を切り離そうとしたのか、ということです。この論文はメディア・エスノロジー分析として大変優れたものですが、同時に9.11の証言としても貴重なものです。グラックには学術論文として、政治イデオロギー的な要素を極力排す意図があったのかもしれませんが。だがこの時点で、そのようにして書かれた論文がすでに強いイデオロギー性をもっていることは、言うまでもありません。そしてそのことも十分意識されている文章だと思います。

少しとまどいがあるが私の論述に乱れが出たかもしれません。私がこの論文に注目した理由は、(1) 9.11にかんしてこのようなメディア分析の必要性があるということ。(2) 9.11の独自の貴重な証言として。(3) 今日の報告の後半で扱う同じ近代日本史家のジョン・ダワーとのコントラスト(ダワーは逆に日本と第二次世界大戦とのアナロジーを最大限に呼びだそうとしています)。最後にもうひとつつけ加えるとすれば、困難な状況で書かれた文章の一つのお手本として。この論文はこの問題にかんしてはとかく感情に走りしがちな論述に対する一つの歯止めになるでしょう。

現場にあって、あるいは現在進行中の事件について書くことは、さまざまな制約と偏向を伴います。キャロル・グラックはこの論文の冒頭でそのことに触れ、現在の事件を扱う歴史家の視角に入りこむ

「偏向」と、ニューヨーク市民としての「わたし自身の場所と位置から由来する偏向」について述べています。それは歴史に介入する文章を書く者の覚悟であり自己弁明でもありますが、グラックにならって私もまたここで、日本の住民としての「偏向」がもろに現われた文章を、次に引用しておきたいとしたいと思います。

...だがそれにしても、このようなブッシュとその周辺の独善や傲岸を支えているのは何だろうか。冷戦後の超大国の軍事的経済的優越や、テロ絶滅といった大義名分はたしかにある。(…)だが過去の大きな歴史的イベントでブッシュに大きな勇気と励ましを与えるものがあるとすれば、それは対日戦争の記憶以外にない。いまベトナムやイラクやニカラグアやソマリアに対する攻撃の正義や正当性を論じることできないだろう。対日戦争のみが、アメリカが介入した数多くの戦争のなかで、戦勝国アメリカの栄光をいまだに保証し続けてくれているのではないだろうか。それは「ならず者」国家に対する正義の戦いであった。東京裁判の判決が示しているように、それは人道上の罪に対する戦いであり、野蛮に対する文明の戦いであった。さらに重要なことは占領政策が大成功をおさめ、それが証拠に日本政府はアメリカの友好国であることを何よりも重んじ、植民地的とも言える従属的な地位に甘んじている。戦勝国アメリカの栄光は、何よりも敗戦国日本の現在によって保証されているのである。9月11日以後のブッシュの演説に基調音としてくりかえされるリメンバー・パールハーバーの背後にあるのは、このような、何とも奇妙な日米関係の歴史ではないだろうか。(『戦争の世紀を越えて』平凡社、17頁)

キャロル・グラックの場合とは異なり、9.11以後の日本にいる私の脳裏で形成されつつあった物語は、パールハーバーの一語を核として結晶しつつあったと言ってよいでしょう。私は上記の文章に続けて次のように書いています。「アメリカ国民に対する大統領の呼びかけの基調がリメンバー・パールハーバーであることは大統領の演説の分析からも言えることであるが、私にそのことを確信させたのは、

むしろ大統領の呼びかけに応えたニューヨーク市民とアメリカ国民、そしてジャーナリズムの反応であった。それは日米開戦時のアメリカの反応をほうふつさせたからである。」こうして私の脳裏で歴史は一回転し、1941年12月8日に回帰します。ところで上記の文章の日付は2002年3月15日となっており、「イラク戦争」の一年前であることに御注意下さい。私の想像力が描きだした物語はまだ未完の物語であって、それが一応の完結をみるのは、「イラク戦争」が始まり、イラク占領の「日本モデル」ということが伝えられるようになってからでした。したがって以下が今日の私の話の本題になります。

### イラク占領の「日本モデル」が語るもの

お手元に三つの資料が配布されていると思います。日付の古い順に並べると、一つは雑誌『世界』2003年4月号に発表されたもので「日本占領研究者の訴え イラク戦争・占領は歴史を無視する計画である」というタイトルというか見出しが付けられています。日米豪などの日本占領研究者23人の署名のあるこの抗議声明の日付は、2003年1月24日。この日に東京の外国特派員クラブで発表されたようです。次はジョン・ダワーのホームページからとられた「歴史からの警告」(Warning from history — Don't expect democracy in Iraq)と題されたかなり長い英語の文章。日付は2003年3月9日です。それから同じジョン・ダワーのインタビュー記事で「イラク戦争を問う 戦後、日本占領とは違う」という見出しがついています(「朝日新聞」2003年4月8日)。この記事の右下に、あの有名な昭和天皇とマッカーサー将軍が並んで撮った写真(1945年9月27日)が小さくのせられていますが、これは適切な配慮で、今日、私がしゃべりたいことの一つは、「イラク戦争」の前と後ではこの写真の意味が非常に変わってくるのではないかと、ということです。

英米系の国際的なニュース網で、日本占領が改めて注目されるといった事態はイラクへの攻撃が開始されるかなり前から始まっていたようですが、日本の新聞テレビではほとんど報道されていなかったもので、この「日本占領研究者の訴え」は読者にかなり

の衝撃を与え、それなりの意義はあったと思います。私は大きな期待をもって「訴え」を読み始めました。この「訴え」は次の文面で始まっています。「ブッシュ政権は、イラクに軍事攻撃を行い、その後引き続きイラクを占領する計画だと伝えられ、その占領は『日本モデル』だといわれている。私たち日本占領研究者は、この歴史を無視した計画に強い危惧を抱き、この戦争と占領計画をやめるべきだと考える。」

私も戦争と占領に反対ですから、ここまでは共感をもって読みました。だがすでに小さな疑念が動き始めている。それはどうやら「この歴史を無視した」ということばにかかっている。歴史に即した戦争や占領であれば認められると言うつもりなのでしょう。この疑問は「訴え」を読み続けるほどに大きくなり、私の異和感は深まるばかりでした。時間が足りないのにそれに続く文章は読みません。要するに、ここで日本占領研究者が主張しているのは、1945年の日本占領は、ポツダム宣言にもとづき、日本政府のみならず周辺関係諸国の同意と協力のもとに行われた正当で合法的な占領であり、米軍の占領前からの周到な準備もあって成功した。だがそのような準備も同意も協力もないままに行われる正当性を欠いたイラク占領は、大きな災害をもたらし、失敗に終るだろう、というのが主旨です。文中にはマッカーサー元帥賛美のことばまで出てきて、これには驚かされました。「日本占領の成功に、联合国最高司令官・ダグラス・マッカーサー元帥が果たした役割も大きい。マッカーサー元帥は、日本をきわめてよく理解した軍人であり、日本人に絶大な信頼があり、...」。本当にそうでしょうか。これではまるでイラク占領反対に名を借りた、日本占領賛美ではないでしょうか。

今の時点でアメリカで「日本モデル」がとりあげられたのは、それがイラク戦争と占領の正当化に役立つからでした。だがアメリカで「日本モデル」がとりあげられたのはこれが最初ではありません。一時期流行したいわゆる近代化論のモデルは民主化し経済的にも成功した戦後日本でした。「日本占領研究者の訴え」で決定的に欠如しているのは、「日本モデル」をアメリカの長期の世界政策のなかに位置

づけてその意味を問う視点だろうと私は思います。もう一つつけ加えれば、戦後の占領期にありえた様々なトラブルやうっ積した屈辱感、さらには占領と対米依存がもたらした精神的頹廃などにたいする認識も欠けているのではないのでしょうか。もっともこの短い声明文にそこまで読みこむのは行き過ぎでしょう。この「訴え」の名誉のためにもう一つ引用したいと思います。「イラクの場合、現状では空爆から地上戦に移り、その後に行われる占領を想定した場合、武力衝突は避けがたく、占領という名の地上戦となり、双方で多数の人命が失われ、廃墟と化することは避けられないといえよう」。この予言は残念なことには的中してしまいました。

ジョン・ダワーがこの「訴え」の起草者とは思いませんが、署名者の一人ではあります。そしておそらくこの23名の署名者のなかでもっとも精力的に9.11以後のブッシュ政権批判とアメリカ国民の反応に対する批判を続けてきた、チョムスキーやサイドと並ぶ、現在のアメリカ社会では希有な批判的知識人です。『敗北を抱きしめて』の翻訳が出て以来、日本の新聞やテレビにも登場することが多かったため、皆様のなかにもダワーの文章に親しんでおられる方は多いと思いますが、今日はインターネットの文章の他に、短いVTRを用意してきたので、まず彼のなまの声を聞いて下さい。毎日テレビのNEWS23のインタビュー記事を録画したもので、正確な日付を忘れてしまったのですが、今年の4月末から5月始めだったと思います。（以下後半部分の音声だけを記録する）

そもそも日本を占領した時は正統性がありました。正統性はたいへん重要です。アメリカは前の世界大戦で大きな名声を手に入れました。あれがいわゆる正しい戦争と見られたために、世界から信望を得たのです。もちろんアメリカのすべての同盟国は占領を支持しました。日本からひどい被害を受けた諸国も支持しました。さらに大勢の日本人も占領を望んでいなかったにせよ、正しいこととして受け入れたのです。マッカーサーらが寛大に振舞ったことにより、日本人の目にも占領は道義的にも正しいものと映ったわけです。

「衝撃と恐怖」(Shock and Awe)というブッシュ政権が押し進めている作戦は、何年か前に一部の戦略家が行った研究のタイトルです。この研究では相手に猛烈な暴力を加えると相手が恐れおののいてすぐに降参し、勝利を得ることができる、という考えが紹介されています。これはアメリカ人に、そしてブッシュ大統領やラムズフェルド国防長官、チェイニー副大統領などに影響を与えたのですが、そのなかで特にいい、つまり肯定的な例として広島や長崎への効果を採り上げています。つまりアメリカの政策は「恐怖」の政策でもあるわけです。私たちは民間人までも殺しています。「付随的被害」と呼び、やむをえないことだとしています。

ダワー氏は、アメリカ国内で愛国的なムードを高めるのに大きな役割を果たしたアメリカのマスメディアに対しても苛立ちを表した。

世界各地の報道に比べてアメリカのメディアが全体として異常なまでに愛国的であったことに疑いの余地はありません。メディアはフセイン像を引き倒す人々の映像であふれています。アメリカ人は、あの映像が大好きです。イラク人がアメリカ人を歓迎するシーンも大好きです。しかし私たちアメリカ人は人々が病院に担ぎ込まれる映像を見ません。アメリカ以外の国が報道しているような、親を失った子どもたちや負傷した民間人の映像を見ないのです。戦時中の日本と似ています。日本人が天皇を批判できなかったように、大統領を批判してはいけません。政権にある人たちは批判をすると「反逆罪にあたる」と言い、公式にそう発言した人さえます。(小泉首相の映像「米国の武力行使開始を理解し支持いたします」)

日本政府の対応にはひどく失望しました。いま私たちは歴史のなかでとても興味深いところに立っています。世界中の普通の人々が「ノー・これは間違っている」と云うのを目の当たりにしました。イデオロギーに凝りかたまつた人々でなく、思慮深い人々です。なかにはイスラム原理主義者のような人もいますが、ほとんど日本人と同じように思慮深くて問題意識のある人たちが「これは間違っ

ている」と言っているのです。アメリカの超大国の振舞に対して『ノー』と言う勇気のある政府まで出ました。しかし歴史的にも政治的にもアメリカを止められませんでしたがその声は重要です。一方、日本を見るとそこには何も見えません。日本はひたすらイエスと言い続け、アメリカに同調しました。日本がよき友人であり、同盟国であるならば、今こそはっきりと意見を述べるべきでした。

今の日本はアメリカをひたすら恐れているようです。第二次大戦後以降、戦後の日本の外交政策は、ワシントンが何を要求しているかを見れば予測できました。それは今でも何も変わっていません。ですが、多くの人々は日本を当事者としては認めていません。日本は単にアメリカのとて忠実な「ケライ」(家来)でしかないのです。

世界の歴史には、実は、二つの力があります。一つは私が深く心配している暴力という力で、今はそれが唯一の力として私たちに圧倒しているかのように見えます。一方、前の世紀、あるいは近代史を見れば、私たちが望みを持てるもう一つの力があります。それは理想主義的で、より平和的な力で、世界に深い影響を及ぼしてきました。ガンジーやその発想、公民権やマーチン・ルーサー・キング、そしてソビエト連邦を崩壊させた力などが、その例として挙げられます。

ダワー氏はここで、日本を愛するがゆえにこれまで味わったことのない絶望感を、今回の日本の対応に対して抱いたことを告白しました。

日本はいつも日米関係が大切だと言います。まるでそれ以外のことは一切関係ないかのようです。日本は世界の中での大きなビジョンを示すことができません。私はもう希望を捨てました。以前は真げんに期待していたのです。私は日本が戦争の悲惨さを知る国として、常に武力ではなく平和的な解決方法を探るといふ姿勢をとるのではないかと期待していました。しかしもう諦めました。日本は世界を落胆させました。

このインタビューを聞いてニュース・キャスター



の筑紫哲也は、「そこまで言われてしまうかと思えますけどね…。ただね国の一番基本的な法律、つまり憲法をないがしろにし馬鹿にしたりする国が尊敬されるはずはない」という感想を述べています。インタビュー記事は、多くの場合、翻訳の問題とは別に、編集の手が入っているので、それをそのまま当人の真意ととるのは危険ですが、他の文章とくらべてみても、このインタビューはダワーの日本人に対するメッセージがよく伝えられていると思います。

冒頭の部分は、「日本占領研究者の訴え」の私が異和感をもった部分と重なっていますが、これについては後でもう少しくわしく述べたいと思います。「衝撃と恐怖」作戦の成功例として広島と長崎が挙げられているのは、ある程度予想されてはいてもやはり衝撃的です。「付随的被害」ということばはそれが人種の偏見や文明化と正義という戦争の大義と結びつくとき、いっそうグロテスクに響きます。このエピソードは広島 長崎とイラクが直接つながっていることを私たちに教えると同時に、遠い大航海時代から現代に至る植民地支配の方式の基本が何であったかをも私たちに教えてくれます。「衝撃」が原爆の例でもわかるように大量暴力と大量殺戮に通じることは言うまでもないが、私はここではとりわけ、この「恐怖」と訳されている原語が awe であることに注目したい。それは単なる恐怖 fear ではなく、畏怖、畏敬、つまり支配と服従の関係を含んだ恐怖です。これは「文明の使命」と対になった植民地支配の原理であって、いまそれがブッシュ政権によって甦えようとしている。

異常なまでに愛国的なアメリカのメディアと、批判的発言を許さない日本の戦中 戦前を思わせるほとんどファシズム的と言ってよいアメリカの現状（先に引用したキャロル・グラックも同じ状況について述べていました）に対するダワーの批判、世界の批判的な動向を全く顧みないでアメリカ一辺倒をきめこみ、どこまでもアメリカに服従を続ける日本政府と日本人に対するダワーの批判 ダワーはついに「家来」ということばを使うに至る に私は基本的には賛成です。だがよくここまで言ってくれたという、この勇気ある発言に対する感謝の気持の一方で、何かどこかが違うのではないかという釈

然としない気持が残ったのも事実です。日本近代の歴史家、あるいは日本占領の研究者としてジョン・ダワーは「家来」などということばを使ってよかったのでしょうか、あるいはさらに強く言えば、そんな権利があるのでしょうか。ここで初めの日本占領の問題にかえります。

ダワーのことば遣いはかなり微妙ですが、最終的には、歴史の条件に合致しない占領を否定することによって、歴史の条件に合致した良い占領を認めています。私の根本的な疑問は、はたして良い占領などありうるか、ということです。だが原理的な問題は別の機会にゆっくり議論することにして、ここでは歴史的現実的な日本の占領に限定しましょう。連合国が同意し、周辺諸国家が同意し、日本国自体が同意した。だがそれで占領の正統性が得られるのでしょうか。おそくそう考えるには、良い戦争と悪い戦争、良い国と悪い国という前提がありそうです。だが第二次世界大戦とは何であったのか。それが自由主義対帝国主義、あるいは文明と野蛮の戦いであった神話はとくに崩れていると思います。ウォーラステインの世界システム論によれば、第二次世界大戦は世界の覇権をめぐる列強の争い、とりわけ米英とドイツの戦いでありました。ウォーラステインが言うように主役はアメリカとドイツで、日本の参戦は付随的なものであったと言えるか否かは別として、第二次世界大戦は、二つのタイプの帝国主義間の戦いであったという主張は説得的です。もしこの観点に立てば、日本占領とは、一つの帝国主義によるもう一つの帝国主義の支配であって、そこでマッカーサーが日本人をよく理解したとか、初期の占領政策にリベラルなニューディール派が参画していたとかいったことが、どれほどの意味をもっているのでしょうか。彼らもまた、一つの帝国主義、つまりアメリカの世界政策の一翼を部分的に担っているのであって、ノスタルジックに楽しく思い出せるようなことではないはずです。

もうひとつの重要な側面。インタビューで語られた「衝撃と恐怖」戦略をもう一度とりだすと、日本占領は「衝撃と恐怖」につながる、あるいはそれと一続きのものであったのではないのでしょうか。それは日本占領でもイラク占領でも同じだと思います。

たしかに占領は解放ととらえられました。だがそれは一つの側面であって、より本質的には占領は恐怖、つまり強制された畏怖と畏敬です。マッカーサーの独裁的・権威主義的ポーズと体質はそれを物語っている。独裁が「家来」を必要とし、「家来」を作り出すと同様、占領はそれにふさわしい「家来」を必要とし、「家来」を生みだす。占領のこうした制度的・精神的頹廃はもう少し注目されてよいのではないのでしょうか。しかもこの占領状態は日米講和条約以後も実質的には長く続いて現在に至っている。占領に続く植民地状態と言い換えてもよいかもしれません。

ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』（岩波書店、2001年3月）は一読して素晴らしいと思うか、見事な本だと思いました。そう思ったのは、この本が日本の歴史家の書いたどの本よりも、戦後日本に生きた人々の現実を説得的に描きだしていたと、少くとも戦後の一部を生きた私自身の実感として、感じられたからだと思います。なぜ日本の歴史家がこういうものを書けず、アメリカの歴史家が書けたのか。それはダワーがこのインタビューで言っている、独自のヴィジョンを見出せない日本の政治と実は相呼応しているのかもしれない。

ダワーがこの書物で強調したことの一つは戦後日本の改革が、天皇制も官僚制も経済政策も教育制度、等々もすべて「日米合作」であったということでした。この「日米合作」ということばにはさまざまな含意が読みとれます。まずそれはアメリカの単なる押し付けではなく、日本の側の自発性と協力があつたということ。もっともこの自発性と協力は、支配

被支配関係のなかの自発性と協力ですから、「衝撃と恐怖」に続く「畏怖」の一側面です。他方この「協力」関係は第三者に攻撃的に対したときは一種の「共犯」関係に転化する。マッカーサー総司令官と天皇が並んだあの歴史的・象徴的な写真は、支配

被支配関係を示すと同時に「自発 協力」関係、そしてさらには「共犯」関係という重層的な意味をもっているのではないのでしょうか。そしていまその映像が、ブッシュ大統領と小泉首相の肩を抱きあつた、まさに embracing を表わす映像と重ね合わされて、私たちの目に映っている。

9.11以後、ダワーの発言は、少しずつ視野を拡げ視座を移動させているように思います。『敗北を抱きしめて』では欠落していた沖縄と韓国への言及が現われ、さらには日本の満州国支配と米国のイラク占領が重ね合わされる（「忘れられた日本の占領」『世界』2003年9月号）。おそらく今の時点で『敗北を抱きしめて』が書かれたら、かなり異なったものになったのではないのでしょうか。ダワーの発言を少し敷衍して述べると、占領が同じ軍司令官の下で日本本土と沖縄と韓国と、それぞれに形態（リベラルな民主化 軍事基地化 軍事＝独裁的傀儡政権）が異なっていたということは、単に地政学的あるいは歴史的な条件が異なっていたというだけでなく、三つの形態の占領がそれぞれの役目をもち相互補完的であったことを意味すると思います。つまりそれはアメリカの世界政策（近くは冷戦、さらにはグローバルな覇権、等々）のなかでしかるべき理由によって位置づけられていたのであって、占領にとっては正統性が第一義的な問題ではないはずで、そして現在のブッシュ政権の政策は一つの転機を示すことになりうるかもしれないが、アメリカの長期にわたる世界政策からそれほど大きく食い出していないことは、戦後アメリカが行ってきたさまざまな軍事介入の歴史が物語っています。リベラルとコンサーヴァティヴの差は、実はそれほど本質的なものでなかったかもしれません。

いま私たちが受けとめかねている戦後（ダワーは1989年までを「長期の戦後」と呼んでいます）という時代をより正確に認識するために、自分の位置をいちど「共犯」ということばを使って考えてみた方がよいのではないのでしょうか。連合軍の占領によって、多くの日本人は再び深い受動性に陥り、加害者としての自己を忘却するどころか、あたかも被害者として自己を云いたてるような風潮を生みだしたようです。だがこの受動性こそは実は共犯性を隠していたのではないか。戦後の日本経済はアメリカの保護の下に朝鮮戦争を契機として（つまり再び朝鮮  
韓国の民衆の犠牲の上に）復興しました。だが韓国の経済が発展する大きな契機はベトナム戦争です。派遣された韓国軍の死傷者の率はアメリカ軍を越えて最大ですが、しかし同じ云い方をすれば、韓

国の経済復興はベトナム民衆の犠牲の上に築かれたこととなります。ベトナム戦争や湾岸戦争やアフガン攻撃やイラク戦争において、沖縄の米軍基地は重要な役割を果たしています。沖縄は戦後も大きな犠牲を払われています。だがベトナムやアフガニスタンやイラクから見れば、本土と沖縄の区別はなく、沖縄は米軍の共犯でしょう。そこで問題にされるのは、本土と沖縄における基地の多少ではなく、基地そのものの存在であり、日米の共犯関係なのだから。

### おわりに 戦後世界像の転換

9.11とそれに続くアメリカ国内のさまざまな反応、さらにはアフガン攻撃、イラク戦争といった事態が新聞やテレビで報道されたとき、私たちが驚かせたことの一つは、そこで使われたことばや映像があまりにも第二次世界大戦の日米戦を想起させるメタファーとアナロジーに満ちていたということです。その驚きはイラク占領とそれが「日本モデル」によって行われるという報道によって頂点に達した感があります。無残な形で再現され展開してゆく、戦争と占領の実態をつきつけられることによって、ようやく私たちが生きてきた「長い戦後」の意味を根底から問い直す事態に立ち至ったのかもしれませんが。「長い戦後」の意味を問い直す契機はこれまでも幾度かありました。ベトナム戦争、68年、89年、湾岸戦争、等々。そのいずれの場合もその問い直しが不十分に終り、徹底できなかったことを悔やんでも始まらないが、それほど日本占領が見事に成功した結果、戦後の幻想がそれほど強力に作用していたのかもしれませんが。この機会を逸したらチャンスは再び訪れず、あとはカタストロフィックな状況が待ちかまえているような危機感に私はとらわれています。

もっとも何をなすべきかについて私は、アメリカの世界政策を見極めて、そこから少しずつ身を引き離そうということ以外には何も提案していません。だがそれは重要なことだと思います。自分のやれることをやればよいのだと思います。突然、何かを立ち上げることは不可能ですから、私はとりあえずは

戦後史をたどりそのさまざまな転換 結節点の分析から、その時には見えなかったもの、失敗や可能性を見出してそれを未来につなげるようなことをやりたいと思っています。

戦後ということばにすでに辟易されている方が多いと思います。たしかに戦後というのは、平和憲法をもった一つの国の一つの時代のひとりよがりでしょう。戦争放棄を宣言した日本だけに、あるいは戦に敗れた枢軸国だけに、戦後があったのかもしれませんが。お隣の朝鮮半島では戦後まもなく朝鮮戦争があり、分断された南北はいまも戦時体制です。中国には戦争が絶えず、台湾はいまも戦時体制です。イラク戦争が始まったとき台湾の副総統が「第三次世界大戦が始まった」と云って話題になったけど、むしろこの方が世界的な常識でしょう。アメリカの軍事介入の回数は際立っていますが、第三世界と呼ばれる地域をも含めて、そして冷戦後も、世界は戦争が絶えず、そのなかで戦後ということばが流通している日本は、何とも世界常識の欠如した脳天気な国です。しかし戦争のない「戦後」にもう一度固執して、戦争をやる戦前に回帰してゆく動きのなかで、「錯覚した戦後」を、「錯覚でない、戦争をやらない戦後」に組み直す道があるはずですよ。

いま「回帰」ということばを使いました。この問題について論じる時間がなくなってしまったのは残念ですが、憲法、教育、軍事、国旗、国家、等々の問題にしても、あるいは首相の靖国神社参拝や、森元首相の「神の国」発言や、東京都知事の「第三国」発言にしても、戦前の日本への回帰がたいへんな勢いで進行していることは明らかで、それは同じ自民党の宮沢、後藤田、野中といった長老たちに危懼の声を上げさせるほどです。この歯止めのきかなくなった「回帰」が強いナショナリズム（国民主義）を伴っているのは周知のとおりですが、奇妙なことにそれは対米従属の強化に呼応している。日本の民族主義者や右翼はどこにいったのだろうか、私はとりわけ9.11以後よく思います。もっとも戦後、日本の右翼の多くは親米的であったのですが。アメリカに押しつけられた憲法を改正し、アメリカの強制された戦後改革を廃棄するという形で進行する対米従属。このパラドクスから脱け出すためには

どうすればよいのでしょうか。

ここで思い出されるのはサイドの「こうした依存関係の力学の頂点にくるのがナショナリズムである」(『文化と帝国主義』第3章第5節「協力, 独立, 解放」)ということばです。この文章は第二次大戦後に植民地支配から解放されたはずの第三世界の新興諸国の独立が、実は旧宗主国の制度と権威をそのまま受け継ぐという形で成立しており、その旧宗主国との相互依存関係を隠蔽しているのがナショナリズムであるという、ポストコロニアル状況を説明しており、その後「それも地球全土のかつての植民地国を最終的に独立国家へと変換して生み出すナショナリズムである。ところがいまやナショナリストの反帝国主義闘争時代は終わりを告げ、解放主義者の反帝国主義抵抗運動の時代が幕を明けたといえるような、ふたつの政治的要因が存在するに至った」という文章が続きます。したがって私たちはこのテーマを直接日本の現状に当てはめることはできない。しかしこの指摘は日本の現状を考えるのにきわめて示唆的です。少なくとも次の三点において。第一に、従属的な相互依存とナショナリズムとの関係を問うために。第二に、グローバル化時代における反ナショナリズム的解放運動を第三世界の「反帝国主義抵抗運動」との関連で理解するために。第三に、日本の戦後 Post war を一種の植民地状態、つまり植民地後 (Post colonial) の観点から再考するために。じっさい、敗戦と占領によって自分たちの植民地支配の歴史を忘却した日本人は、自分たちがいま植民地状態にあることを自覚する感性をも喪失してしまったのではないのでしょうか。

ブッシュ政権の目論見はことごとく外れ、糊塗された真実、偽りの大義名分、相対する文化や社会に対する無知、知性と倫理性の欠如、独善的な暴力の野蛮性といったものが時とともに露呈してきています。戦争の理由であったはずの大量破壊兵器はいまだに発見されず、あれだけの破壊と追跡のあとにも、そしてあれほど莫大な賞金をかけたにもかかわらず、元凶とみなされたビン・ラディンとサダム・フセインもまだ発見されない。マスメディアを動員し

て行われた報道のいくつかは虚偽であったり「やらせ」であったことが(例えば、国連における国務長官の証言の根拠となった情報や写真、フセイン像の倒壊やリンチ救出事件、等々)、次々と明らかになっています。歓迎されたはずのアメリカ軍は住民の根強い抵抗に出会って、以後の米兵の死者は、ブッシュ大統領が戦闘終結を宣言した時点のすでに二倍を超え、その数は増加の一途をたどっている(全くカウントされないが住民の死者はその何倍かに達しているはずで)。

これが「日本モデル」の占領が直面した現実でした。だがそもそも「占領」(occupation)とは何でしょうか。それは国家主権と境界によって限定された空間の占有権が争われた、国民国家時代の古典的な戦争と戦略の一部をなすものです。グローバル化時代において戦争の意味と形態が変わってきていることは、9.11事件自体がすでに示していることであり、またそれゆえにアメリカ合衆国は、テロという相手の見えない敵に対して宣戦布告をするという一方的、変則的な戦争を行わざるをえなかったのです。現代の戦争は境界の無い戦争です。アメリカは圧倒的な戦力を持ち、科学技術の発達によるより破壊的な武器弾薬の使用によって自軍の人的な損失を軽減する新たな戦略戦術を開発したが、それは戦争の古典的な概念を根本的に変えるところまではいかなかったようです。「衝撃と恐怖」の戦略や占領の「日本モデル」といったことばと概念はそのことを示していると思います。

占領の「日本モデル」ははじめから失敗に終るべき性質のものでした。だがその占領の「日本モデル」の当事者であった日本国が、この非道で時代錯誤的な「占領」にあえて占領軍として参加するという歴史的な醜態をさらすとするれば、そこに待受けているものが何であるかを予測するのはさほど困難ではない。もし醜態をさらすだけだすめば、幸運というべきではないのでしょうか。

本稿は2003年6月13日に行われた比較文化研究会の報告原稿に手を加えたものです。